

悠久の河

28

周藤彌兵衛翁物語
村尾 靖子

孫娘

彌兵衛は足を止めて、少女をじっと見た。見えが無かつた。ぼろをまとつたわが身と伸びた髭面が彌兵衛に、これ以上、近付くなと足を止めさせた。

「おじいさまと呼んでおるわ。変わった少女よのお。どこの子やら?」

「なぜ、わしに握り飯など……?」

「おじいさまが、好きだからよ」

「なぜ?」

「おじいさまは、山にばかりいて、岩を削つてばかりいるから、わたしの生まれたのを知らないでしよう」

「そうじやのう。どこから来たのじや?」

「隣村よ」

「ここまで一里(四キロ)の道をか」

「そうよ」

「歳は何歳になる?」

「五歳よ」

「名は、なんと言う?」

「つるよ。周藤つる。お父さまの名は、周藤勘六よ」

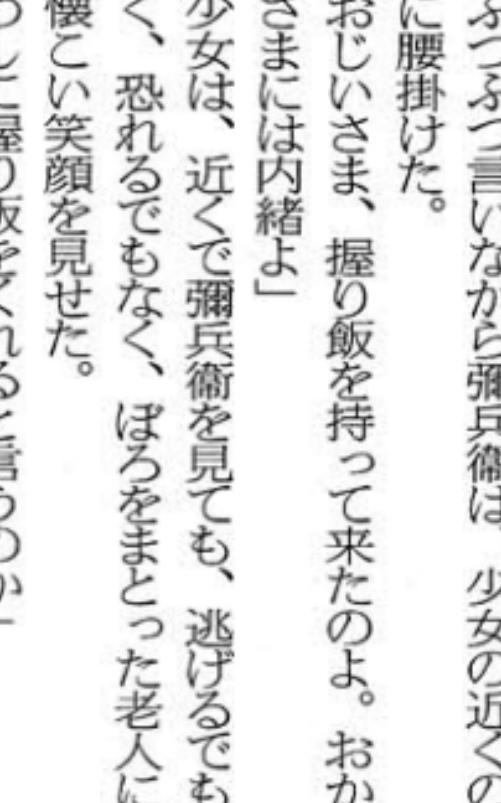
「なんとな?もう一度、ゆつくり言ってみてくれんかのう」

彌兵衛は自分の耳を疑つた。

「何度も言うわ。周藤つる。お父さんの名は周藤勘六。おじいさまの息子でしょ。おじいさまは岩ばかり削つてあるから息子の名前も忘れたの?ちゃんと、おぼえていたの?」

濁りの無い無邪気な目が、いたずらっぽい表情を見せた。

「お父さまは、わたしの生まれたころは、わたしの家に住んでいたんですって。でも、おじいさんが岩山に登つたから、ときどき、こつそりとか帰つてこられなくなつてしまつたんだつて、お母さんは怒つているのよ」



画 高田勲